

# 農政商工観光委員会 県内調査活動状況

1 日時 平成21年1月29日(木)

2 出席委員 (10名)

委員長 木村富貴子

副委員長 望月 勝

委員 中村 正則

森屋 宏

保延 実

渡辺 英機

竹越 久高

丹澤 和平

小越 智子

内田 健

欠 席 なし

地元議員 鈴木 幹夫

深沢登志夫

3 調査先及び調査内容

(1) 【産業技術短期大学校】

調査内容(主な質疑)

問) 来ている方々が実際に耕作できる面積は、1区画当たりどのくらいか。

答) 敷地は、約300㎡、約90坪で、建物が約15坪、その周りに作物をつくっている。

問) 我々が一番気になるのは、応募する人がどのくらいあるのか。実際に入学する人がどのくらいあるのか。辞退者がどのくらいあるのか。辞めていく人がどのくらいあるのか。それから、就職する人がどのくらいあるのかということ。

就職については100%と非常に良いとのことであり、いろいろな企業に巣立っていくというのは非常に素晴らしいことだと思う。

先ほどの説明の中で、国立大学と併願しているから、実際に合格しても入学する人が減ってしまうという話があった。4年制と併願するのはあまりないのではないかと思うが、本当にそういうデータがあるのかわからないので、そのへんの説明を。

実際に入学したときには、例えば83人くらいいて、途中でリタイアする人が出てくるといことだけれども、気になるのは、正味の数でいくと辞めている人がかなりあるのではないかと思うが、そういうことも踏まえて今後のありかたを。

答) 辞退者の数については、昨年度は、山梨大学との併願で2、3人いた。

入った学生の状況であるが、今年度の4月の入学生については、84名入学して、1月16日現在で78名。6名が退学者。19年度については、79名が入学して71名が在学している状況である。

入った学生に対してきめ細かい指導を心がけ、家庭との連絡も密にしながら、できるだけ状況がわかるようにし、本校に通学できる環境を整えている。休みが増えてきたような場合には毎日のように担任から本人や家庭の方と連絡をとるようにしている。実は、退学に至ってしまうような生徒については、成績の問題もある。最終的に成績を見まして方向転換することとも出ている。早めに対応して取り組んでいくこととしているが、今後とも、そのようなことが少なくなるよう努力してまいりたい。

問) もう一つ気になるのは、生産技術科や電子技術科は、ここ数年、応募する人も少ないというような状況。山梨県全体で考えたとき、なんとなく、塩山に立地しているという地理的なことも影響しているのではということもある。全県から通いやすく、アクセスもよいところに立地すればもっと違う状況もあるのではないかとということも考えられるが、その辺につい

てはいかがか。我々も検討していかなければならないことだが。

答) 今年の出願状況であるが、生産技術科が20名の定員に対し一般入学検定期試験まで20名となっており、電子技術科も30名の定員に対し26名の出願状況となっている。全体でも100名の定員に対し107名となっている。今年は、校長はじめ関係者の努力によって非常に出願状況が良い。

全体的な検討であるが、資料の7ページ、8ページにあるとおり、こちらの施設はまだ10年だが、職業能力開発施設全体では、老朽化やニーズにあわないという状況になっているので、その取り組みとして、平成21年度上半期までに、職業能力開発施設のあり方ビジョンということで、施設の再編見直しも含めた方向性について検討してまいりたい。

答) 出身高校別に見ると、富士北稜、谷村工業、富士学苑、富士河口湖といったところから7名、昨日、試験を実施した一般区分入試を実施したが、大月短大附属、上野原、桂、トータルで17名が受験している。応募者は107名である。

問) 郡内と国中ということではなくて、例えばこの学校が甲府市に立地していたらどうなのかということを知りたかった。私の地元である南アルプス市の人が、「本当はここに行きたいんだけど、塩山だし」という相談に来るので。

問) 郡内の方から、というのは、私が聞き取ったことだったが、答えをいただいた。

郡内の優秀な企業へは今まで1名くらいしか入っていない。郡内も不景気で、機運として、高専の設置に非常に関心が高い。そういう意味では、この産業技術短期大学は就職率100%ということで、高専と同じようなところがあるのではないかと思う。後で入学者の学校別の一覧表をいただきたい。

郡内方面への就職が非常に少ない理由として、ここが企業のニーズに答えられていないのか、それとも、郡内地域からここへ来る人が少ないためなのか、どのようにお考えか。

答) 郡内方面の優秀な企業からも学生を採りたいとの要望が来ていた。機械系の学生が欲しいとのことであったが、その方面の学生が少なかったため、要望に応えられなかった。

今年度は、3回、高校を訪問し、「郡内には、このような素晴らしい企業がたくさんある。ぜひ、本校も見に来てほしい。我々もがんばるので。」と話をしたところ、特に桂高校では、推薦の生徒を含め、大勢送り込んでくれた。他の高校も、見学に来る等、着実に理解していただいているところだと思う。

また、企業の方にも出向いて、当校の内容を御理解いただきながら、活動していきたい。

問) ぜひ、企業ニーズなどを勉強しながら、時代のニーズを考え、対応していくようにしてほしい。

問) もともとは甲府にあって、主として企業内訓練をできないところを請け負っていた。

今は、企業内訓練といっても、すぐに辞めていってしまう、すぐに首を切らなければならないということになっているので、そんなにかげられない。来たらすぐに自分の日当、月給以上に稼いでもらわなければならないのだから、そんなに企業内訓練をしてもらえない。

実際に、どの範囲から企業が来ているのか。

答) 地域的には、やはり、夜間の講座が多いので、峡東方面を中心に、甲府市方面、甲斐市方面、釜無工業団地からも来ていただいている。やはり甲府が多く、27%くらい。南アルプス市から12%くらい。昼間の講座は、笛吹市。遠くは韮崎市とか北杜市あたりから6%くらい。

問) 夜の方であれば、自ら意欲を持ってするという事なので。ポリテクセンターがどうなるかわからないが、本来、ああいうところで、このような在職者の訓練ができるような講座を。小さい企業は、なかなか自分で訓練ができないところがあると思う。熟練工が、知識ではなくて技術、技能を教えるコースというのが大事だと思う。この学校の構想が持ち

上がった当時、石川県では、「職人大学校」というのをつくろうという動きがあった。山梨県は、総合能力開発センターを専門学校に変えようとした。私は「これは時代に逆行している」と言った。専門学校というのは東京に行けばいくらでもある。民間でいくらでもつくれる時代になぜ県立でつくるのか、という議論もあったが、甲府に高等看護学院をつくることになって追い出され、ここへ来た。この本来の機能を考えてみると、良いところだったのかなという気もするし、夜間訓練の意欲のある人が、自ら学ぼうとする施設がここで良かったのかなと。そういう経過だった。

ただ、夜間コースを充実して、地方の人たちが、自分のところではとても技術訓練できないというような講座にしてほしい。

先ほど、委員がおっしゃっていたが、本県には高専がないのでその代わりをしてくれるところだと。工業高校で3年間学び、その上に2年間のこの短大ができて、あわせれば高専と同じような知識も技術も習得できると期待をしているが、この工業高校出身者は24.3%。そうすると、工業高校で学んだ学生と普通高校で学んだ学生とでは、ここに来て、何ら問題なく専門課程に入っていけるのか。

答) 現在、職業能力開発施設については、組織と学科再編について検討を進めているところである。専門課程と普通課程だけではなくて、在職者訓練をどうするか、あるいは失業者の訓練をどうするかということも含めて検討している。

在職者訓練については、4つの施設で行っているが、委員から話があったとおり、通うことのできる利便性というのが非常に重要であるので、その辺を検討の要素として考えていきたい。

また、こうした在職者訓練については、できるかぎり、物づくり系の訓練に集約する方向で検討を進めている。

答) 本校は専門の技術を身につけさせると言うことが主な狙いであるので、そこにもっていくために、工業高校からの学生は基礎的なものをかなりもっているので、普通高校からの生徒に、1年生の前期の3ヶ月くらいは、学生の進度を見ながら個別に対応したり、コースを設けて指導を充実したりしながら、できるだけ早めに、工業高校から来た学生に技術的な知識が追いつくよう、指導している。2年生の授業ではかなり追いついている。例えば、電子技術科では、ソーラーカーコンテスト、ロボコン山梨で優勝、準優勝をしているが、それに取組んだ学生のうち、半分以上が普通高校から来た学生である。このように、普通科から来ても十分対応できるように指導している。

問) 今の話でいくと、この専門課程のカリキュラムというのは、工業高校からの学生にすれば、普通高校からの学生のために同じ事をもう一回やり直さなければならない。そういうものに時間を取られてしまうということは、国立の高専とはカリキュラムが若干違うということなのか。

答) 高専の場合は、入った時点でその専門のコースも入れながら、同時に、普通系の授業、一般の授業、数学系その他、そのようなものもある。専門も5年かけて行う。理数系の一般教養も、5年間、かなりの時間をかけて行う。

やはり、工業系高校で基礎を充実してやってきた学生については、それに繋げて高い専門技術を身につけさせる、普通高校から来た学生はそこから伸びなければならないということで、それを繋げるためにはコースをつくらなくては大変だという気がしている。そのあたりを、今、検討して、いい形を考えているところである。

問) 工業高校からの学生から、「そんなことは知っている。もう一度1年生に戻りたくない。」といった不満が出てこないかなと。

答) そういう危惧もある。しかし、3ヶ月程度、専門技術の基礎を教えていくと、普通高校からの学生も伸びていくので、工業高校から来た学生もうかうかできないというような形で一緒に頑張るようになる。



産業技術短期大学の会議室で説明・質疑の後、施設を視察した。

(2) 【富士川地域地場産業振興センター】

調査内容(主な質疑)

問) 県内からは、どの辺りから来るのか。

答) 当施設の場合、県外、特に静岡方面が多く、6割が静岡県。小中学生は、県内が大半。体験者については、大体4割くらいが幼稚園生、小中学生で、6割が大人。方面的には、静岡が多いが、神奈川あたりからもかなり来ている。静岡が半分以上。

問) リピーターは多いのか。

答) 観光バスだと、昼食がとれないという問題があるため、主流は乗用車で来る方。初めて来た方は、中に入ってみると環境がかなり良いということで、「良いところですね。」と褒めていただけるお客様も多く、何回も来ていただいている方もいる。ここは道の駅になっており、観光バスが立ち寄るが、その中のお客様が後に家族連れで来るといったこともある。

問) 県内でもなかなか知られていないところだが、他地域や静岡等の県外へのPRとか、集客に向けての活動など、どのような努力をされているのか。

答) PR方法としては、キャンペーンに参加するとか、インターネット等の媒体を使っている。イベントを1ヶ月に一度行っているが、そうしたときは、管内にはチラシ配付、静岡方面には新聞を使って宣伝している。また、地場産業センターの全国組織があるので、そのイベントに出展したり、関係団体を通じてPRしている。

答) 他にも、イベントがある場合は、月に80万件から100万件のアクセスがある、県の「富士の国やまなしネット」へ書き込みをしていただいている。メルマガ配信数が1万件であり、大変有効な手段である。

問) これは大変な施設で本当に苦労されていると思う。

月平均1万人が入ってくるということだが、実は、私の家の近くに七福神の寺というのがある。3年前に真言宗の寺が7つ集まってつくった。今年で3年目だそうである。今年の正月に、観光バスが来ていてびっくりした。「1日から5日までに何人来たのか」と聞いたら、2万人であり、バスで500台とのこと。「どこから来たのか」と聞いたら、「横浜から来た」とのこと。「いくらなのか」と聞いたところ、はっきり覚えていなかったが、それなら中央道で来るより安いと言った記憶があるので、5千円以下だと思う。弁当付きでみたまの湯に入って七福神を巡った。あそこで2万人といったらものすごい人。「どこの旅行会社か」と聞いたら、横浜の旅行会社であったので、「どうしてか」と聞いたところ、「今は田舎へも帰らない。そして、近くて、金がかからなくて景色のよいところで、なおかつ御利益があるところ。七福神巡りはうってつけであり、塩山もあるが、遠すぎて1日では無理だ」とのこと。考えてみると、旅行会社が集めるものはすごいものだと感じた。

ここは工芸館。工芸館というのは、お客がふらっと来て、そこでジュースを飲んで帰るといった施設ではないので、きちんと宣伝をしないと。まずは良い宣伝媒体を使ってやらないと。伝統的なものに、みんなに興味を持ってもらえるような施設にしていただければと。道の駅というのは一過性のもので、それもリピーターにつながればいいのだが、ぜひ宣伝をしていただきたい。

善光寺の近く、郡内、そういった他のところと比べては申し訳ないが、他のところはどのくらい来ているのか。

答) 概ね甲府の地場産センターが二十数万人、郡内の地場産センターが14万から15万人くらいといった状況。

問) 場所の良い郡内で14万人なので、この11万人は良く活用されているのかなど。

ここの運営費は全体でいくらか。

答) 19年度決算ベースでは、償還金もあり、全体では1億円近い。

問) 実際の利益はどのくらいあるのか。

答) 概ね、事業費ベースで約2,300万円くらい。

あと、補助金等の収入が8,000万円くらいあるが、そのうち県が3,300万円、町から2,700万円ほどいただいている。

高度化資金の償還に1億6,000万円ほどかかるが、これは20年度で完済するので、21年度からはこの分がなくなる。

問) そうすると、売上の収入が2,300万円くらい。ほとんどが県と市町村の補助金。大変だと思うが、できる限り市町村の負担が軽減されるよう努力していただきたい。

問) イベントをするときの各市町村との連携について教えていただきたい。

また、中部横断自動車道ができると、さらに県外から来ることが予想されるが、国道52号等に看板が少ない。それについては。

答) 各町の課長レベルの組織があり、イベントを開催するときには運営委員になることになっていて、各町からご協力をいただいている。

中部横断自動車道が開通したらここが経由地になって地盤沈下したというのでは困るわけだが、幸い、峡南地域は無料区間となるため、乗り降りがしやすい地域と考えており、開通したあかつきには、高速道路から降ろす工夫が必要だと考えている。財団としても、この公園を活用しながら、高速道路から降ろす工夫をしていきたいと考えている。また、単独ではなくて地域と連携しながら備えていきたいと考えている。

看板の件だが、たしかに、看板が少なくてわかりづらいという要望をいただいております、県の建設事務所をお願いして国の方と折衝していただいた経緯があるが、路線ごとに看板の数が決められており、設置すべき数は既に設置してあるのでだめだ、とのことだった。そのため、何カ所か財団で設置したものもあるが、今後、数を増やし、適切な場所に設置したいと考えている。

答) 1点、補足させていただきたい。10年以内に中部横断自動車道が開通するという中で、このセンターは、峡南全域のインフォメーションセンターという役割を果たしていかなければいけないと考えている。峡南6町を広域で観光振興、観光PRしていこうということで、富士川地域・身延線沿線観光振興協議会という組織が既にある。専従の職員を置いてそういった取り組みを進めているので、この協議会とも密接に連携して広域の観光PRといったものを行っていきたいと考えている。





富士川地域地場産業振興センターの会議室で説明・質疑の後、施設を視察した。